

最後まで続けることで生まれてくるもの

## GREEN PRIDE ～大楠高校に誇りを～

春季大会地区予選。一戦目の相手は横須賀総合高校だった。結果は10対0(5回コールド)で敗退。二戦目の相手は津久井浜高校。15対3(8回コールド)で敗退。大楠高校の春季大会はあっさりと終わった。これはオフシーズンのチームとしての過ごし方を振り返ると今のチームの積み重ねたもの、そのものだった。たった9人が揃わない。そんな日々を続けてしまったから・・・。

大会が終わり、新年度4月。新入生100名の生徒の中からなんと入部希望者7名。それも、大楠高校で高校野球をやりたい。高校進学ではなく就職を考えていたけど、高校野球の夢を捨てきれない。座って学習することは苦手だけど、高校野球がやりたい。そんな新入生がグラウンドにやってきた。彼らはグラウンドで笑顔をみせ、元気な声を弾ませ本当に楽しそうに野球をしていた。そんな姿をみて、指導者たちや上級生も初心を思い出していた。気付けば野球部員は16名。これで実践練習や練習試合もやりやすくなった。何より、チーム内に競争が生まれたことによって、夏の大会以降の不安を抱いていた部の存続に一筋の光が見えてきた。2年生が2名しかいないところから7名の新しい同志。これで新チーム以降も大楠高校として高校野球ができるのだ。自然と前向きな空気がチーム内に流れてきた。

この16名で大楠高校の野球を夏の大会までの3ヶ月間でもう一度つくっていかうと指導者達は考えた。週1回、チームとしての戦術を整理して、練習や試合に繋げていくことを目的にミーティングを行うことからはじめた。まず、チームの行動方針や意識の統一のために10分間。さらに、ポジショニングや守備に関する約束事、走塁に関する約束事など、テーマを決めてノートにメモを取りながら論理的、視覚的に学習する時間を30分間行った。机に向かって、頭の中だけでイメージして、ノートに整理していくことが苦手な選手ばかりで定期的計画的に行うことにためらってきていたことだったが、指導者たちにとって新たな挑戦だった。だが、不安をよそに選手達は集中力をみせ、必死に理解しようとしていた。その姿をみた指導者たちは、このミーティングがチームで勝つという想いを受け止めるいい機会になったと実感していた。

5月中間テストも終わった頃、夏の大会前の不安と新入生達の学校生活への慣れと疲れが見え始め、チームのバランスは崩れつつあった。9人しかいない今までは、全員が試合に出場していた。ただ、今のチームでは、7名は先発出場ができない。言葉では理解していても、実感として、まだチームが勝つことより、自分が活躍することだけにどうしても思考がいつてしまう集団であった彼らには戸惑うことが多かった。もともと自分に自信をもてず、競争する前に諦めてしまう選手が多いチームだったが、その勝負の世界での弱さが少しずつ出てきてしまった。先発を外された選手は動きに覇気が無く、何も行動を起こすことはせず、もはやそこにいるだけ。チームの雰囲気への足かせとなっていた。指導者は、その行動はチームが勝つために、自分のために必要なのかを問いかけた。それでも殻に閉じこもってしまう選手は試合途中でもグラウンドを去ってもらっていた。帰ってしまった選手は次の日、何事も無かったように来る。高校野球はやりたいのだ。指導者達の話は理解できている。でも、行動に移す自信がないのだ。だからこそ、乗り越えてもらいたい。同じことを何度も繰り返していた。結局、1年間そこから抜け出せず、こんなことでは勝てるチームはおろか、最大の目標である『応援されるチーム』には程遠い状況となっていた。

まもなく夏の大会の日程が決まる6月中旬頃、太鼓の音と元気あふれる力強い声が聞こえてきた。『かっとなげ！○○』。選手達は、梅雨時の暑さにうなだれながらウォーミングアップを行おうとしていたが、全員の動きが止まり、その音に注目していた。その音は野球応援の為に集まってくれた合唱部を中心とする有志の応援団が練習していた音だった。ここ5年間、この野球応援は着々と規模が拡大されてきていた。それは、大楠高校の数少ない部活の中で大きな志をもち、音楽を通じて生徒たちの成長を目指している教員が中心となって応援を盛り上げてくれていたからだ。同じように悩みながらも希望をもって継続的に活動が続けてきているからこそこの応援だと話してくれていた。そして、今年は横須賀明光高校との部活交流で横須賀明光高校のチアリーディングと吹奏楽部も応援団に加わり、ここ近年にはない大応援団が結成さ

れていた。立ち止まっている選手に指導者達は話をした。今年も周りから応援されていることに誇りをもとう。さすがに選手達の顔つきは変わっていた。アップでのトレーニングをさぼり気味に行っていた1年生も少しずつしっかりとやるようになっていた。

そして、大会抽選。1回戦の相手は平塚学園だった。ミーティングで指導者は相手チームをこう表現した。「本気で甲子園にいくと思って練習しているチーム」。選手達の顔はこわばった。さらに大楠高校は神奈川県大会で53-0と歴史的な大敗をしていること。覚悟をもって試合に望めなければ棄権してもいいということを伝え、選手1人1人に覚悟を迫った。そして、全員で最後まで戦い抜くことを誓った。それからの練習は集中力がどんどん上がっていった。皮肉なことに最後の夏に到底敵うことのないチームとの戦いを前にやっとチームになったのかもしれない。それからまもなく、神奈川県大会の開会式が行われた。彼らは堂々と行進していた。

1回戦、対平塚学園。場所は小田原球場。2時間以上もかかる球場にも関わらず保護者やOB、先生など今まで以上に多くの方が応援に足を運んで来てくれていた。選手達は緊張しながらもどこかワクワクした表情を浮かべていた。そして、いよいよ試合がはじまった。1回裏いきなり1点を許したもののダブルプレーで後続をたち、3回までエースの落ち着いた投球と守備の見事に予測されたポジショニングによって1対0で意地をみせた。しかし、相手投手に打線はかみ合わず、結果は10対0で敗退。試合が終わった後、選手達の顔はどこかほっとしていた。その顔は思っていた以上にやれたと思っていたのか、なんだかんだいっても2年半野球部としての活動をやりきったからなのか。ただ、いずれにせよチームとしてバラバラになっても、人数が揃わなくても、覚悟と選択の連続を2年半の間繰り返し最後の日までグラウンドにいたことができたことを、誇りに思ってもらいたいという言葉が指導者達は贈った。そして、指導者達は球場を後にしようとして保護者の方に最後に挨拶へ行ったとき、口々に感謝の言葉をいただいた。その中で、遠い球場にもかかわらず、横須賀の多くの地域の人たちが、応援しに来てくださっていたこと。その方々が、大楠高校野球部のがんばりに感銘を受けてくださったこと。激励をたくさんかけてくださっていたことを伺った。昨年の勝利から2年連続と結果にこだわってきていた指導者たちにとって、救われる気持ちになった言葉であった。このチームが夏の大会での大舞台にしっかりと立てたことに彼らに対する誇りと感謝を改めて感じた。

公式戦の次の日、このチームでの最後のミーティングをおこなった。彼らから出てきた言葉は、保護者や指導者に対する感謝。チーム内のお互いの距離のとり方や気持ちの出し方に苦労したが、やり遂げてよかったということ。誰が休もうと、覚悟をもって練習をやりきった達成感など、3年生の心の中から湧き出る感情をしっかりと整理することができていた。ここで彼らは1つ成長したのだ。やりきった後に湧いてくる感情を扱うことで、人は大きく成長が出来るからだ。大きな節目を迎え、彼らの中で大楠高校野球部での経験が大きな根っことなり、その上で次の進路に向けて、前を進んでもらいたい。そして、大楠高校最後の野球部員達は、しっかりとこのバトンを受け取ってもらいたい。そんな気持ちで最後のミーティングを終え、このチームの夏は終わった。

